



# 標準語教育について思うこと

藤 原 與 一

◇ 共通語というのは、自然に全国的な共通性を得てきたものだと思います。今日では、国語の共通語が、そうとうにはつきりとしてきました。これは、旧来の学校教科書のことばや、近來のラジオ放送によるところが多いと思います。共通語は、いきおい、東京語本位のものになりました。

標準語とは、——その体系のことにはふれないとして——、理想の言語体系として、公に設定されることが、實際上、もっとも望ましいものであります。設定され、かつ見守られ、改訂されつつ進歩せしめられるべきものであります。すくなくとも、標準語とは、規範として標準視されるものでなくてはなりません。これは、自然に共通度を高めたということとは、本質を異にするはずであります。

国定教科書の文章がつづられた場合など、すでに作者は、このようなことが全国におこなわれてよいと、考えていたでありません。が、それはなおその人の標準語意識とでも言うべきものであつて、標準語設定とは言えません。その後はだんだんに、世の標準語意識が高まってきました。今や、公式に国の標準語体系を設定すべ

き地盤はほほととのつたと言つてよいでしょう。標準語設定のころみは、すでにあらわれています。それに付けても、ここに問題としなくてはならないのは、つぎのような点です。

◇ 理想の標準語は、日本語の發展的動向にさおさすものでなくてはならない、というのがその一つです。日本語の發展的動向という時二つのことが考えられます。一つは、現実の日本語全体をよく考慮に入れなくてはならないということ、一つは、その發展の傾向、言いかえれば發展の可能性に目をそそがなくてはならないということであります。

これまでの標準語観は、とかく、東京語一本にひかれがちのものでした。これは、一面から言えば、当然のことでもあります。国の共通語は、政治文化の中心地を中樞として流行するのが自然の勢であり、人はだれしも共通語に即して標準語を考えるからであります。しかし、おのずからにして共通語人である東京語人が、安易に、自己の共通語意識の中で、すくなく標準語の標準性を考へるとしたら、それは、かならずしも合理的ではないと言えましょう。おちつくと

ころは東京語の線で標準語が制定されるにしても、理想の標準語を考へる手順としては、東京語人のかたがたも、いちおう、みずから東京語本位の共通語生活に開き直つてみて、広い視野で、全日本語の発展的動向を考へてみるべきだと思ひます。国の東と西とでは、その言語生活にいろいろな相違があります。語アクトセントの一例を見ましても、東が「ヤマ(山)」と言へば、西には、「ヤマ」と言ふ人たちもかなりあるという状態です。標準アクトセントをどうするかとなると、慎重に考へれば、右の一つの処置が容易ではありません。時の勢、自然の勢は、ものを比較的簡単に解決してもいくでありません。学理に忠実に標準語を制定しようとするれば、われわれは、諸方言をかかえて、制定の容易でないことを感じます。

なにぶんにも、ことばの生活は心の生活です。一国の標準語とあれば、これは、国中の人々が快くつかうことのできるものでなくてはなりません。さらに言へば、どの地方の人々も、これをつかうことによつて、その精神生活を伸ばすことができるようなものであるのにならぬことはありません。全国民を、よい国語人に養ひ上げていく標準語体系の設定とその前進とが望まれます。

◇ 「標準語の制定」などと言つと、とかく、これを待望するだけの態度をよびがちです。が、すでに申し述べましたように、理想の標準語は全日本語の発展的動向にさおさすものでなくてはならないとすれば、じつは、国語に生きる一人々々が、標準語形成の責任者です。この自覚を強くすることが、今日の標準語問題の、だいいじな問題だと思ひます。標準語制定のためには、一方から言へば、学徒学究が協力して、国語の歴史的な現実をとらえ、国語の全貌を明らか

にすることが必要でありましよう。それとともに、他方、右の自覚をすすめる意味の純粋な「標準語運動」が必要だと思ひます。学校教育全般では、ことにこの自覚の立場がたいせつなものではないでしょうか。理想の標準語をより上げていくのだというよりな覚悟が、ここで持たればよいと思ひます。

◇ 公に標準語が判定されていない今日では、手本を前に置いての生活はできません。するとやはり右に述べた自覚の方向がたいせつなつてきます。

自覚の第一階梯としては、共通語生活を理解させるということではないでしょうか。日常百般の言語生活で、その場その場に(狭い社会へも広い社会へも)適応し得るようになつて、これが、発展的な共通語教育だと思ひます。方言の指導で、よく、ふだん着とはれ着との二重生活ということが言われますが、事実上、そのようにできればそれでよいようなもの、考へかたとしては、「その場その場への適応が自由にできる」ということ、その適応力の養成を、二元的に考へることになつてほしいと思ひます。個の言語生活、あるいは生活語の醇化向上を、一本に考へるのです。場への適応力が強くなつて、その人の言語生活はのびやかなものとなりましよう。これが、他方から見れば、共通語生活を持つてゐるということでありま

ります。さてこの人は、もはや己の言語生活の改善を自覚しています。無自覚に近くして自然に今の共通語人になり得てゐるのとはすこしちがいます。この人のこの自覚は、他からは共通語意識とも言へるとともに、本人としては、より標準的なものを追求する心でもありま

しょう。つまりこれは標準語意識とも言えるものとされます。教育の場で、教師が相手にはたらかかけて、相手をしてその言語生活に自己批判の目をむけさせることに成功すれば、およそ、共通語意識即標準語意識と言ってよいものを植えつけたことになりましょう。国の公の機関ができて、いよいよ標準語制定にとりかかるとしても、現在の、自然に醸成されている共通語の諸要素は、詮議の結果改めて標準視することになる場合が多かろうと思えます。共通語であるものと、標準語として打出されるものとは、きわめて近い関係にあるでしょう。この点で、教育の実際場面での現下の標準としては、共通語指導がやがて標準語指導になると言えます。

◇  
こうして、「標準語指導」即共通語指導ということになりました先生のあたまには標準語の理念がかがやき、毎日の実際は、「共通語生活の指導、すなわち、国の標準的な言語生活と言ってもさしかえのないような実質をそなえた共通語生活の指導」がおこなわれれば、何よりよいというしだいでありませう。

指導法の基本はもともと簡単です。

先生が十分に国語に目を見開き、その全語生活において、場への自由な、すぐれた適応力を不断に示すのが一ばんよいと思えます。ことばの教育の機会ほど、教育の機会の多いものはないでしょう。時々刻々、相手と対面することに、言語教育の好機があります。その一々で、先生のよい手本が自然に示されること、これが一ばんすなおな標準語教育になると思えます。「悪いことは直ましよう」式の掲示や、カードを持たせて友だちと取りあいをさせる方法によることなどのいわゆる方言矯正は、ちよつとおもしろいところはあ

っても、よく考えてみると、わりにあじけないものです。もつと人間のなやりかたを重んじたいと思えます。

さりとて、慢然と自然の手本を示しておくだけではたりません。そこには、ととのえた計画がいります。その計画を、どちらかといえば押さえつつ、気長にやっていくのがよいと思えます。かれらは何かのひょうしにひょつとことばに気づけば、もう、ひとりで、いろいろのことばを考えるようになります。

国の東部地方では、発音の面を特に重んじて計画を立て、国の西半地方では、語法の面からはいるように計画を立てるのがよくはないでしょう。どの角度から、その言語生活を自覚させてもよいこととです。自覚させやすい角度をえらぶべきでしょう。単語をとっておもしろく自覚をさそうこともできます。しかし、個々の語の場合その語は悪い！などは、簡単に言わない方がよいと思えます。

言語生活は人間の生のいとなみですから、あまりこまごましくきゅうくつには言いすぎないようにしたいものです。アクセントにしても、個々の語アクセントよりも、文の抑揚の大きなうねりを問題にして教育にはいることが肝要です。それが、ことばの各方面の教育のためになります。文表現本位にやっていたら、しごとが、生き生きと生きてきます。ここでも、理想の言語教育は、国民の精神生活文化生活を、よく引き上げていくものであるべきこと、理想の標準語は、国民の生活内容をいやが上にも高めていく、きわめて能動的な実践体系であるべきことを、思わねばなりません。

すべては指導者その人の自覚された言語生活にかかっています。ここにまだ、現下のなやみがあります。ことばを外形的なものと考えすぎる傾向は、まだかなり強いでしょう。その外形にも目を見開かぬ人たちが、せまい方言愛におぼれたりしています。